

発 刊 の 辞

学 長 水 田 三 喜 男

わたくしは、微力ながらお国へ御奉公の意味で、治国平天下の道を今日まで只管歩んで来た。なお、今後も歩み続ける心算であるが、この道も、結局のところ、人を得ないと、なかなか達成しがたい。何事にせよ、その根本は人にある、人造りが基礎的の仕事であると考えられる。

それに、私事に涉つて恐縮であるが、わたくしの一家は教育一家ともいふべきで、身内に教育に従事する者が幾人かあり、その人々の境涯を羨ましいものと眺めていた。

かような環境に在るわたくしが、異身同体的な関係にある新藤副学長と共に、総合大学としての城西大学の創設を企図したことは、別に不思議でもあるまい。

今回、その設立が文部省の認可を得たことは、実に慶ばしい次第である。このよろこびが身に有難く感ぜられると同時に、わたくしは、今後、この大学をどのように発展させて行くか、大きな責務が一身にかかっていることを思うと、手放しで喜こんでばかりはおられない。

もちろん、わたくしの大学発展の抱負と計画は出来上っており、その構想の全貌はいまここに発表するまでもなく、仕上げを見て頂きたいと思うのである。

わたくしが、かように広言したからといっても、大学の建設は一人の学長の力で出来上るものとは思っていない。教職員はもとより学園関係者の全員が和心協力してこそ、良い教育が行なわれ、期待される人間像の形成が可能となるものと信じている。

わたくしが、乞われるままに、日頃抱いている所懐の一端を述べるゆえんもここにあって、大学設立草創において、いち早く佐々木先生の提唱に

よって「城西経済雑誌」という銘を打って、研究論文集が誕生して、しかも開学の佳き日を記念して、これが配布されるとは、本学発展の瑞兆とみて、まず、間違のないところであろう。その上雑誌の内容については、執筆者各位が力を入れた珠玉であると確信している。

いうまでもなく、大学の使命の一つは、学問研究にあるので、これに勢いを得て、教授者各位はますます御自愛の上、一層研鑽を積まれて本誌が号を重ねるごとに、より立派なものとなるよう、御精進を切に望んでやまないのである。

一言燕辞を述べて巻頭の言葉とする。

昭和四〇年四月吉日